

論文名：祖母になった女性の認識についての研究

— 祖母になった年齢と子どもの性別の違いに着目して — (要約)

新潟大学大学院保健学研究科

氏名 藍木 桂子

(以下要約を記入する)

1. 研究背景

超高齢社会に伴う平均寿命の延伸により、女性が祖母として生きる期間(祖親期)は長期化する傾向にあり、祖母になることは、女性のライフサイクルの中で重要な位置付けをもつものとして注目されている。

2. 研究目的

本研究では、祖母になった女性を対象に、祖母になった年齢および子どもの性別が祖母になった女性の認識に与える影響について明らかにすることを目的とした。

3. 研究方法

関東甲信越で、調査時点までの6年以内に初めて祖母になった女性65名を調査対象とした。データ収集はI、IIの二部構成からなる無記名自記式質問紙によって行った。

I：調査内容は、基本的属性、子どもの性別、孫の年齢、子ども家族への支援量、支援への負担感・満足感、祖母になる前後の子どもとの関係である。祖母になった年齢は「59歳以下」と「60歳以上」の二群、子どもの性別は初孫が息子の子である場合を「息子」、娘の子である場合を「娘」の二群に分けて比較した。分析方法は Mann-Whitney U test, Fisher's exact, Student's t-test, Spearman (rs) を用いた。

II：調査内容は、文章完成法(以下SCT: sentence completion test) 6項目である。分析方法は「質的統合法(KJ法)」を用いた。新潟大学大学院保健学研究科研究倫理委員会において審査を受け、承認(第131号)を得た。

4. 結果

I：祖母になった年齢の二群間において全ての項目で有意差は認めなかった。子どもの性別の二群間比較で、日常的な支援量($p=0.028$)、精神的な支援量($p<0.001$)、総支援得点平均値($p=0.014$)、支援への負担感($p=0.004$)が娘の群で有意に高かった。息子の群は3つ全ての支援量と負担感との間に正の相関があり、娘の群は「日常的な支援量」のみ負担感と正の相関がみられた。子どもとの関係は、息子の群で孫が生まれる前と比べて好転傾向がみられた($p=0.034$)。以上の結果より、子どもの性別による祖母になった女性の認識の違いについて、IIでさらに検証を進めることにした。

II：「祖母になった私の認識」についてのSCTデータは、息子の群の元ラベルは220枚、

娘の群の元ラベルは 275 枚で、それぞれ 7 つのグループに統合された。概要は以下の通りであった。

息子の群：息子をもつ女性は、祖母という立場に喜びを感じつつも出しゃばらず、夫・息子・お嫁さんとの関係を調整して、老後は子どもを心の支えとし、自立して生きていたいと考えている。

娘の群：娘をもつ女性の認識は、忙しくも充実感をもち、娘の母である責任から娘と孫を見守り、娘・夫との関係に葛藤を感じつつ子どもの負担とならず静かに暮らす老後を望んでいることが浮き彫りとなった。

5. 考察

I：祖母になった年齢の二群間比較で、全ての項目で有意差がみられなかったのは、対象者の年齢が 60 歳前後の者が多かったため、年齢のばらつきが少なく、違いが検出されなかったことが考えられる。子どもの性別で、息子の群は支援量は少ないものの、支援の提供が負担感となりやすいが、子どもとの関係が孫が生まれる前と比べて好転する傾向がみられ、義娘（嫁）の存在が関係していることが考えられる。娘の群は日常のおよび精神的な支援量が多く、日常的な支援に負担を感じ、孫が生まれる前と比べて孫が生まれた後の子どもとの関係を低く評価した者もあり、これは娘との間に生じる葛藤によるものとも考えられる。

II：息子の群では、嫁に気遣い息子家族に干渉せず、支援を控える様子がみられた。一方娘の群では、娘の母親である責任から娘たちを見守り、娘と親密な関係になったものの娘の甘えや依存が高じて負担を感じる様子もみられた。老後については、息子の群は将来的な息子との精神的なつながりを持ち続けることを望み、娘の群は娘からのケアを期待している様子もみられた。

6. 結語

本研究全体を通して、祖母になった年齢は女性の認識に大きな影響を与えておらず、子どもの性別が影響を与えていることが示唆された。息子の群は、支援量は少ないものの支援の提供に負担を感じ、嫁に気遣いながらの支援は支援自体が負担を伴うものであるが、息子との関係は好転する傾向が示唆された。一方娘の群は、娘の母親としての責任感から支援量が多くなり、娘との関係は親密になったものの娘の依存や甘えが高じて支援の提供に負担を感じ、娘との関係に葛藤が生じることが示唆された。祖母になった女性が、一人の女性として自身の生き方に関心を向け、子どもに対する支援や家族との関係性も含め、どのような祖母になりたいか、考えられる機会をつくれるよう、保健医療専門職者は検討することが求められる。